

研究奨励賞

日本色彩学会研究奨励賞を受賞して

I am honored to receive the CSAJ Research Encouragement Award.

若田 忠之

Tadayuki Wakata

湘南工科大学

Shonan Institute of Technology



この度は日本色彩学会研究奨励賞という荣誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。今回、単著という形での投稿となりましたが、論文の内容は大学院生時代からずっと追いかけていたテーマであり、この場を借りてまずは恩師である早稲田大学人間科学部元教授の齋藤美穂先生に心よりの感謝の意をお伝えさせていただきます。

研究の原点である学部生の時代から「色」をテーマに研究を行い、初めて学会発表を行ったのも色彩学会でした。「色」がライフワークの一つである私にとって、色彩学会での受賞は大変感慨深いものであります。

私は現在、「色を用いた感性情報の印象表現」といったテーマを中心に研究を進めております。少し碎いて表現すると、様々な感性情報（例えば香り、音楽）の印象やイメージは“人”の中に確かに存在しますが、それをアウトプットすることは非常に難しいと言えます。そこで、色を用いることで感性情報の印象やイメージを伝達するコミュニケーションツールの一つとして機能させようというものです。

今回受賞致しました論文は、上記のテーマの根幹に関わる内容であり、色が印象の結び目となり様々な感性情報の交点となるというアイデアを支える柱となる立ち位置の研究です。

色を研究対象とした場合には何等かの方法で客観的に色の情報を記述する必要があり、そのために様々な表色系が考案されています。特にマンセルシステム、オストワルトシステム、NCSなどが国際的にも知名度が高く、様々な場面で目にします。その一方で、私の研究では日本発のPCCS (Practical Color Co-ordinate System) を長らく使っています。その理由としては「トーン」の概念が大変ユニークで、「色を用いた感性情報の印象表現」という研究テーマに合致するためです。

元をたどるとシュヴルールやピレンの理論の中に tint, shade, tone といった形でその源流をみることができますが、いずれも色を三属性でとらえたときに、

色相は独立させつつ、“あざやかさ”と“明るさ”の概念を複合して色を捉えている点が挙げられます。

色の三属性を体系的に学んでいない人にとっては、特に“あざやかさ”や彩度の変化は分かりにくいものです。その一方で例えば“色の淡さ”や“濁り”のような変化は多くの人々が主観的に持っていると言えます。ここでいうところの“淡さ”であれば高明度かつ低彩度の領域が該当し、“濁り”などは中明度かつ中彩度の領域が該当します。こういった点を端的に表せるのがトーンの強みであり、色の明度や彩度の変化に伴う印象の変化を直観的に捉えることができます。

このようなトーンにおける系列的な変化を量的に扱うための手法の一つとして、Brilliantness を提案しています。論文の中でも述べていますが、心理的な明るさとあざやかさを統合することで1つの次元として扱うことができるのが最大のメリットです。特に、将来的には感性情報の表現に色以外の要素を組み込むことも構想しており、説明の次元が増えた際により少ない次元で高い説明力を持つということは大変強みのある事です。

ただし、この Brilliantness のアイデアは明るさ（明度）とあざやかさ（彩度）の概念を否定するというものでももちろんありません。どうしても1次元で表わしたときに中心に両者の競合が起きる箇所が存在することも確認されているので、そういった部分については明るさとあざやかさを切り離して説明する必要が生じることもあります。さらに、色相ごとの対応の切り分けなど、まだまだ道半ばであることも事実です。今後も精進して研究を続けていきたいと思えます。

最後に、「日本色彩学会誌」から電子化に伴って「色彩学」と「日本色彩学会論文誌」に切り替わる節目に立ち合い、その第一報目の論文として掲載して頂いていることにも身が引き締まる想いです。今後とも微力ながら日本色彩学会の発展、並びに色彩に関する学術研究の発展に寄与できればと思えます。